

全科協ニュース

URL <http://jcsn.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成20年1月1日発行（通巻第218号）

特集：展示解説員 展示解説員に見る「もてなしの心」

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 滝本 秀夫

はじめに

当館への来館者が最初に接するもの、それは展示解説員（ミュージアムコンパニオン）たちの優しい笑顔とあいさつです。私たちは親しみを込めて彼女たちをMCと呼んでいます。現在、当館に勤務するMCは23人、週4日の勤務体制のため1日あたりの出勤者は15人前後です。業務内容はガイドツアーやスポットガイドなどの展示解説だけではなく、受付・案内、団体への券売、子ども向け体験教室の企画運営等々、実に多岐にわたっています。年間40万人を超える来館者に様々な面で直接対応する、いわば「博物館の顔」です。そんなMCの来館者への対応が60%以上を占めるリピーターの確保に大きく影響していることは想像に難くありません。私はここ数年MCの研修担当として様々な面で彼女たちと接する中で、その仕事意識の根底にある「もてなしの心」が来館者に与える影響に大きく関わっているのではないかと思うようになりました。今回は当館のMCたちの仕事の一端を紹介し、そのことについて書いてみようと思います。

採用から独り立ちまで

MCは県の嘱託職員という形で採用され、1年契約で4回まで更新ができます。毎年2月までには退職予定の人数分新規採用者が決まり、3月中に15日間程度の事前研修を実施しています。この中では当館の基本的な運営方針、専門の講師による立ち居振る舞いや話し方、学芸員による展示の説明などに関する研修が行われます。その内容は多様で渡される資料も膨大なものになります。研修のない日にも自ら進んで博物館を訪れ、展示資料などを確認する姿が

よく見られます。4月からは制服を着用し、実際のシフトに入って勤務となるわけですが、しばらくは先輩たちについて見習いという形になります。しかし、4月下旬からのゴールデンウィークに入るとそうはいきません。1日1万人を超える来館者を迎える中で、一人で来館者に対応する場面が多々出てきます。そして5月中旬からは学校の遠足シーズンで毎日何十台ものバスに乗ってやってくる子どもたちの対応に追われます。そんな経験を積んでいく中で、やがて成長し一人前のMCとなっていきます。

朝の風景

MCの1日は、朝9時の朝礼に始まります。身だしなみのチェック、発声練習、本日の注意事項の確認などがその主な内容です。15分程度でこれらが終わると開館準備に入ります。エントランス前への看板の移動、釣り銭、チケットの準備など、ただでさえあわただしい15分の中で、雨天の場合には団体ごとの傘入れを設置して団体名を付けることまでしなければなりません。やがて9時30分になりMC



朝、笑顔で来館者を迎える当館のMCたち

による開館を告げる放送が流れると、受付カウンターに引率の先生たちが並ぶのが平日の朝の風景です。受付担当のMCは、てきぱきと事務的な手続きを済ませ、館内での注意事項を丁寧にしかし素早く伝えます。受付を終えた先生を先頭に子どもたちが大きな声で「おはようございます!」と博物館に入ってきます。MCは笑顔と子どもたちに負けない元気な挨拶でこれに応え、進むべき方向に案内します。何気ないやりとりですが、子どもたちの笑顔を見ていると、このことがどんなにか子どもたちの気持ちをほぐし、あるいは高揚させているか、計り知れない効果があるのではないかと思います。オリエンテーションを申し込んだ団体は担当のMCが案内してそれぞれの部屋などに案内されます。子どもたちはここで博物館の中で待っている恐竜たちや隣接する沼に飛来した白鳥などについての説明を聞き、わくわくする気持ちを押さえきれないような状態で展示室に向かっていきます。

ガイドツアー

MCが展示室において行う解説活動の中心になるのがガイドツアーです。1日3回、5つの展示室をリレー形式でまわる約1時間のコースです。当館では、新人のMCがこれについて研修するために必要なマニュアルが用意されています。彼女たちの中では、これはマニュアルAと呼ばれています。シナリオ形式で書かれており、これを暗記すれば基本的なガイドツアーを一通り行うことができるようになっていきます。しかし、彼女たちはそれだけでは満足しませんでした。これとは別にマニュアルBと呼ばれるものがあります。この中には個々の展示物に関するさらに深い内容が記されており、総ページ数は413ページにも及びます。



ガイドツアーでの一コマ

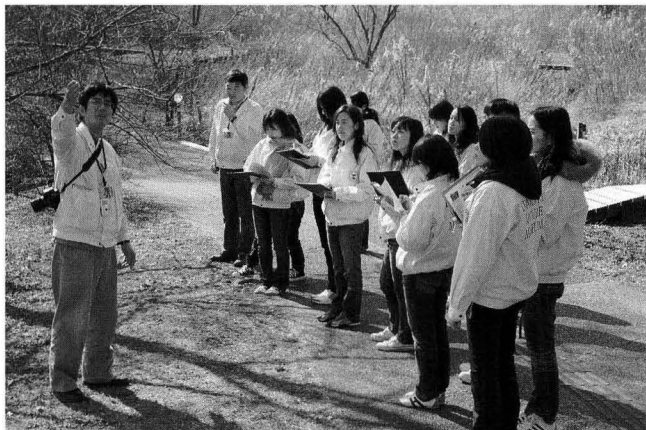
このマニュアルは歴代のMCたちがその勤務の中で、「もっと深く知りたい」、「来館者に喜んでもらえるガイドをしたい」という気持ちから自主的に作り上げてきたものです。このためMCが閉館後に図書室で調べものをしたり、学芸員に疑問に思うことを尋ねたりする光景は日常茶飯事です。こうした知識を得て自信を持ち、自分なりにカスタマイズしたガイドツアーができるようになります。また、実際のツアーでは子どもから大人まで幅の広い参加者を相手に、時には子どもたちに質問を投げかけ、時には大人に配慮した深い知識を引き出し、飽きさせることなく次の担当者にバトンを渡します。ガイドツアー参加者へのアンケート調査によれば、参加者の満足度は非常に高く、MCの努力が実を結んでいることがわかります。

脈々と続く伝統

しかし、彼女たちはいつ、どんな形で「もてなしの心」を身につけていくのでしょうか。このことには14年前の初代のMCから続くある種の伝統が大きく関わっているものと思われます。開館時に採用された21名のMCたちは、2ヶ月に及ぶつらい研修に耐え、何もなかったところからスタートして様々なマニュアルを作り上げていきました。そうした努力の果てに「私たちの博物館」という意識を持つまでにいたった彼女たち。その意識は直接その姿を見たことのない現職のMCたちの中で今でも生きているのだと思います。新人MCたちにとって、日々の仕事の中で目にする先輩たちの仕事に対する姿勢以上に影響の大きいものはないでしょう。また、各年代のMCたちが、よりよい来館者サービスをという向上心を持ち合わせていたからこそ、その伝統は引き継がれ、今日に至っているのではないでしょ



自らが企画運営するイベントで参加者に対応するMC



学芸員から野外施設の植物について研修を受けるMCたち

うか。

おわりに

当館は2005年に開館10周年を迎えるにあたり、その後10年間の運営指針である「進化基本計画」を策定しました。その柱のひとつに、この「もてなしの心」Hospitalityをあげています。MCのみならず、事務系職員、学芸系職員、ショップやレストランの店員、その他博物館の運営に関わる全ての者がこの心を持てるよう心がけていきたいものです。

職員が作り出す展示室の空気 —ダーウィン博物館と千葉県立中央博物館—

千葉県立中央博物館 森田 利仁

千葉県立中央博物館は、平成元年に開館した。自然史の研究者を多数抱える博物館として特異な船出をしたが、展示室での来館者サービスについては、もっぱら展示解説員という非常勤職員に頼ってきた博物館でもある。ところがここ数年で、解説員の数は一激減してしまった。そのため来館者サービスを、大幅に見直さざるを得ない状況にある。そしてそれだけではなく、解説員が少なくなってしまったため、展示室の空気自体が、大きく変わってしまったのである。まさに失ってはじめてわかる、ものの価値である。

今日、博物館の在り方について、さまざまな議論が展開されている。その中には、組織や制度に関する議論も見かける。しかし、働く職員の心にまで踏み込んだ論はきわめて少ない。職員の士気、やりがい、働く意欲、そのようなものが語られない博物館論は、おそらく実践には何の役にも立たないだろう。ここでは、2つの自然史系博物館のエピソードを紹介しながら、職員の心の問題の重要性について触れてみたいと思う。

大きな改善はお金、小さな改善は職員の士気

1993～98年まで毎年モスクワを訪問し、当地の博物館事情を観察する機会に恵まれた。とにかく、ソ連邦崩壊直後のモスクワの博物館事情は悲惨であった。1993年、モスクワ市民は日々の食料確保に追われ、博物館の見学どころ

ではない。ほとんどの博物館は閉館しているか、開店休業状態であった。化石のコレクションでは世界有数の古生物博物館（ロシア科学アカデミー）では、職員にまともに給料が支払われないため、展示室や収蔵庫の維持も大変である、という話を聞かされたのを憶えている。この社会混乱の中、1995年に、モスクワの代表的な自然史博物館、ダーウィン博物館が新館をオープンさせた。20年もの歳月をかけて、やっと完成した建物であった。しかし開館直後の展示室は、建物の新しさとは対照的に、動物の剥製などが几帳面に陳列されているだけの、きわめて質素なものであったのを記憶している。



ダーウィン博物館外観

ところが、2007年の夏、久しぶりに訪問したダーウィン博物館は、見違えるように良くなっていた。建物も増設され、電子機器を取り入れた大掛かりな展示更新もあった。しかももっとも目を引いたのは、展示室の各所に、来館者のための小さな工夫がたくさん存在したことである。動物の剥製が展示されているケースの外には、その動物の毛皮が露出しており、触れるようになっていた。また化石の展示ケースの横には、小さな箱が取り付けられており、その箱を開けるとやはり触れる化石が見つけられるようになっていた。いずれもきわめて小さな改善であるが、退屈した子どもがいかにも触りたくなるような仕掛けである。まさに来館者のための、かゆいところに手が届く工夫がなされていると感心したものである。1995年当時の無味乾燥な展示室が、来館者にとって親切で楽しい場所に変身していたのである。たかだか10年の間での変貌である。20年も30年も改善のない展示室がめずらしくない日本に比べ、10年間、しかも社会の大混乱期を含む10年間におけるダーウィン博物館の変貌振りは、まさに驚異的な変革であると言ってよいのではないだろうか。ロシアの他の自然史博物館、たとえば上述した古生物学博物館などに比べても、際立った変貌である。ダーウィン博物館には、もう一つ、他のロシアの自然史博物館と決定的に異なるところがあった。これはあくまでも筆者の主観であるが、職場の明るさである。館長から末端のフロアサービス係りに至るまで、筆者がインタビューした職員はすべて明るく、にこやかに対応してくれた。そして自身の仕事を楽しんでいるように感じられた。ここにダーウィン博物館10年の秘密が、隠されているのではないだろうか。大きな改善は、お金さえあればどんな博物館でも実現できる。しかし小さな日常の改善は、職員の士気が高くなければ、決して実現できないはずである。これは、世界共通の原理なのではないだろうか。

解説員が作り出す展示室のやわらかな空気

収蔵資料を充実させるには、資料に愛情を持つ職員がいなければならないし、展示室を良くするためには、展示室を愛する職員がいなければならない。これもよい博物館を作り上げるための、世界共通の原理である。千葉県立中央博物館においては、前者は自然史の研究者、そして後者はベテランの展示解説員であった。残念ながら、今は、過去形で語らざるを得ない。



子どもが開けたくなるような秘密の箱が、壁に何気なく備えられていて、開けると触れる化石が出てくる。

展示解説員は、その名のとおりに展示物を解説する職員である。しかし解説だけならば、研究者による展示解説も実施している。いわゆる学芸員解説である。研究者は、実際に展示物を製作したり、その解説文を執筆した本人であるから、展示解説員よりも深みのある解説ができるはずである。実際、そのような研究員の解説に対するファンも存在する。しかしながら、解説員が来館者を包みこんで作り出す雰囲気は、研究者にはまねのできない独特なものなのである。

来館者は、解説員と接するときには、明らかにリラックスしている。反対に、研究者に接するときには、明らかに身構えていることがわかる。それは、研究者があまりにも真剣に、いわゆる「マジ」になりすぎるためなのではないかと考えている。研究者は、自身が作った展示、自身が学問的な裏づけを与えた展示に対して説明するときには、一生懸命に、真剣に語る。それは、自然なことである。しかし、来館者の多くは、学びに来るのではなく、楽しみに来るのである。このような来館者にとって、研究者の真剣なまなざしは、冗談が通じない顔でしかないのかもしれない。たとえばある展示資料を指して、「こんな展示、面白くもなんともないんじゃないですか？」と、来館者が冗談を言ったとする。研究者はそれを、冗談として受け止めることができるだろうか。おそらく、できないだろう。しかし展示解説員ならば、それを冗談として受け止めることができる。むしろ「もっと面白くない、変な展示がありますよ」とか、「奥にはもっと面白くない、変な研究者がいますよ」と誘い水をかけ、話をどんどん面白くすることもできる。一言で言えば、展示物や研究者を話題にして、来館者といっしょに笑うことができるのである。それをきっかけに、



ベテラン解説員の解説を聞く来館者(千葉県立中央博物館)

来館者同士の会話、たとえば親子連れならば、お父さんと子どもの会話をはずませることもできる。研究者の前では恥ずかしがって黙っていたお父さんが、子どもに「お父さんが小さいころには、こんな生きものをたくさん近所で見かけたんだよ」と話すような雰囲気を作り出すこともできる。まさに並木(2005)が書いているように、展示物を

前にして、親子の交流が実現するのである。

中央博物館における展示解説員という存在は、展示を解説する人ではなく、来館者の心を開かせる人であったのではないかと考えている。実際来館者アンケートでも、解説員については、解説がよかったという評価よりは、親しく話しかけてもらったこと、意見を聞いてもらったことへの感謝の声のほうが、圧倒的に多い。単なる解説サービスだけならば、PDA(携帯情報端末)や音声ガイド装置で代用できるが、展示室の雰囲気づくりは、機械には決してできない。「後悔先に立たず」であるが、解説員の数を大幅に減らしてしまったことは、中央博物館にとって、取り返しのつかない大きな損失であったような気がする。博物館には、来館者と接することにやりがいを感じる職員が不可欠なのである。

並木美砂子(2005) 動物園における親子コミュニケーション ―パンジー展示利用体験の比較―。風間書房, 247pp.

ボランティアの個性を活かした展示室での対話

国立科学博物館 展示・学習部 学習課 ボランティア担当 齊藤有里加、熊野 有祐、松澤 裕子

はじめに

国立科学博物館の来館者の中には、余暇を楽しむためなど学習以外の目的で来館した人や、「知りたいな」と思っているが研究者と話すには敷居が高いように感じてしまう人もいる。そのようなときにも気軽に話せる存在が、教育ボランティアである。2005年の調査では、博物館や博物館類似施設1,113施設で、7万6千人を超えるボランティアが活動している¹⁾。活動内容もそれぞれの博物館の特性を活かして多岐に渡っている。本稿では国立科学博物館における教育ボランティアの個性を活かした活動を紹介したい。

20周年を迎えた教育ボランティア制度

国立科学博物館の教育ボランティア制度は、1985年に参加体験型施設「たんけん館」を開設した時に始まる²⁾。たんけん館の利用にあたり、青少年に展示の体験や観察の方法を教えたり助言をしたりすることで、発見することの喜びや、学ぶことへの意欲を引き出す役割を期待された³⁾。「た

んけん館」における教育ボランティアの来館者とのコミュニケーションを担う役割は、現在他の展示室にも広がっている。2004年「新館(現:地球館)」のオープンに続き、2007年には、「日本館」がリニューアルオープンし、教育ボランティアの活動場所も広がった。発足当時8名だった登録者は、2007年現在333名となった。1日あたり平均約40名が館内各所で活動している。

実際の活動の様子

国立科学博物館には、多種多様な得意分野や個性をもった教育ボランティアが、それぞれの特性を活かして活動している。来館者がボランティアと展示室で出会うことによって、対話が生まれ展示に興味を持ち、科学への関心が高められる。また、ボランティアにとっても来館者との対話は、自身のモチベーション向上やさらなる展示への理解につながる。以下の①～③に活動の一部を紹介する。



ディカバリーポケットでの活動

①ガイドツアー・ハイライトコース

来館者の「まず何から見たらいいかわからない」「面白いところに連れて行ってほしい」といった要望に応える形で、約1時間で館内を回れるツアーを実施し、1日に3～4回実施される。このツアーでは、各ボランティアが独自にコースを設定している。国立科学博物館が大好きな教育ボランティアが、お勧めの展示を案内する。基本的にコースの組み立てはツアーを実施するボランティア本人に任せているので、コース内容はバラエティに富んでいる。

実施にあたっては、来館者の年齢層や人数、館内の込み具合なども勘案して、臨機応変な対応を心がけている。来館者の視点に立ったガイドツアーには、展示や来館者の希望に応えるための綿密な予習が必要であるが、ツアー前に下見を行うことや、各自でまとめた資料を共有するなどの工夫を凝らしながら対応している。ガイドツアーの案内看板に、その担当者が実施するツアーについて紹介する「担当よりひとこと」の欄を設けた。そこには、「宇宙線を見ます!」や「めぐって楽しいつまみ食いガイドツアー!」など短い言葉だがとても魅力的でユニークなコメントを見ることができる。それぞれの思い出も深いため、小道具を用意している者も多い。来館者からもおおむね好評である。

直接受ける利用者からの「ニュースで話題になったあの展示!」「だいぶ様変わりして驚いたが、昔のことに話が弾んだ」といった反応は、活動へのフィードバックとやりがいにつながっている。

②展示室での活動

参加体験型展示室の「たんけん広場」の「発見の森」「身近な科学」には、ハンズオン展示が用意されている。それ

ぞれのボランティアは自分なりの工夫をして、展示と来館者の間に立つコミュニケーションを図っている。例えば、「偏光板を覗いたときにびっくりするように、きれいな貼り絵を作ろう」とか、「自分は鳥の話が得意だから、鳥探しができる展示の前で!」、あるいは「自然観察が好きだから、身近で見られる植物のはなしを準備しよう」といった具合である。来館者の興味を引き出すきっかけを作るため、それぞれに面白い「問いかけ」を用意するように心がけている。

地球館各階展示室にある休憩や情報提供、学習支援活動等多目的に利用できる「ディスカバリーポケット」では、「ボランティアワゴン」がある。ワゴンの中には展示の解説を助けるためのコミュニケーションツールが用意され、フロア担当の教育ボランティアは、それらを活用して展示を案内している。例えば、江戸時代以降の日本の科学技術を紹介している地球館2階展示室「科学と技術の歩み」では、おもちゃの茶運び人形と、タイガー計算機の実演を行っている。からくり人形に子どもたちが駆け寄り、寄ってきたり、「なつかしい」とタイガー計算機を楽しそうに操作する高齢者の姿を見かけたりすることができる。

③森の標本箱カウンター活動

雑木林の生態をモデル化し、ジオラマ風に展示した地球館3階「発見の森」には、「森の標本箱」のコーナーがある。「森の標本箱」は、「古生物」、「シダ」などのタイトルがついた16テーマ別にボランティアのグループがあり、これらのグループが職員と協働で製作し、主体的に活用している観察箱である。タイトルがつけられたそれぞれの箱の中には、展示に関連するツールが使いやすく整理されている。



展示室でのご案内

これらのツールは、1998年に職員とボランティアとで共同開発をした時から頻繁に使われ、見直しを断続的に進めてきている。2007年は直接開発・維持に携わったボランティアが月ごとに異なる箱の研修を順次行い、ボランティア相互の知識の還元、共有化を目指した。研修はそれぞれの担当ボランティアが、火～日の一週間、1日10～20人のボランティアに対し、ツールのコンセプトと使い方を伝えるという形で実施する。研修の担当者はツールそのものの説明ではなく、展示の生態学的な背景を意識し、例えば「ヘビ」の箱の場合、「ジオラマ内には5種類のヘビが隠れているよ」「ジムグリがモグラの巣に入っているのはどうしてかな？」等のツールを介した具体的な問いかけ例を紹介するように心がけている。毎月変わる「おすすめ箱」は、展示室にも変化を与え、来館者とのコミュニケーションにもはずみがついた。研修をする側も研修を受けて実施する側も、それぞれに意見を出しながら、活動を発展させている。

ボランティアの個性を活かすには

研修方法として、展示に関わる一般的な情報について知識の共有化を図っている。例えば展示の開発に携わったそれぞれの研究員による解説をビデオに撮ったものを活用している。また館内にあるICTを活用した「展示情報端末」も有効な情報源となる。これらの情報を基本とした上で、書籍や個人の経験等を活かすようにしている。

展示解説の現場では学術的に回答できないレベルの質問もボランティアには投げかけられる。そのような問いへの答えを来館者が求める場合には、その場でのあやふやな回答は避け、「わからないことはわからないと素直に伝える」こととしている。場合によっては、国立科学博物館の研究員や専門家に引き継ぐこととなる。自主的な研修活動も活発に行われている。ボランティア同士で、学びあう積極的な交流が行われている。

また、ボランティアからよく発せられる言葉がある。「展示室で使ってみてもいいですか?」「解説に使いたいのだけれども」「手に入らないかな?」「この展示の由来について知りたい!」。ボランティアの頭の中には「やってみたい」ことがたくさん詰まっている。このようなアイデアの相談を受ける担当職員は、「展示の内容に合っているか?」「手に入るものか?」「安全か?」「保管場所は?」「館のミッション」「教育目標」等々について、アドバイスと判断を



ボランティアによる相互研修

行う。展示室という空間で「できるかどうか」の障壁を乗り越えるには、助けが必要なのである。相談や対応を一つ一つ行うことを通じて、相互作用的により豊かな発想がはぐくまれ、それがボランティアの成長を通じて来館者にも還元されていく。ボランティア担当職員として、そのようなフィードバックをこれからも実現して行く助けになりたいと考えている。

おわりに

国立科学博物館において、教育ボランティアは科学と人々をつなぐサイエンスコミュニケーターとしての機能の一端も担っている。サイエンスコミュニケーターに必要な資質として、「コミュニケーション能力」「科学技術に関する専門性」のほかに「コミュニケーション環境を整える能力」があげられている^{iv}。教育ボランティアの個性を伸ばした活動のためには、自身の専門性とコミュニケーション能力を向上すると共に、自らが持つ知や技能を社会還元するための「伝えたいことを形にする力」が必要と思われる。ボランティアと館の連携を深めることで、来館者にとって親しみやすく、ぬくもりのある、顔の見えるような、展示室での対話を重視した活動を今後も展開して行きたいと考える。

i 平成17年度 文科省社会教育調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/004/h17.htm, (2007.11.21)

ii 国立科学博物館：教育ボランティア活動10年のあゆみ，国立科学博物館，p. 63, (1996)

iii 同上再掲。

iv 小川義和：博物館と大学との連携による科学コミュニケーターの養成，平成17年度日本科学教育学会第29回年会日本科学教育学会年会論文集，29，pp. 87-90，2005.8

ハーレー・デービッドソン博物館が、2008年夏に開館へ

オートバイ・ファンの皆様、とりわけハーレー・デービッドソン（＝ハーレー・ダビッドソン）のファンの皆様、お待たせしました。ハーレー・デービッドソン博物館が、ハーレー・デービッドソン社の本社がある米国ウイコンシン州ミルウォーキーに、2008年の夏に開館する予定だ。20世紀に度々整備計画が立てられてから、ガス欠やエンジン・トラブルに見舞われて、頓挫したハーレー・デービッドソン博物館であるが、ようやく製造元であるハーレー・デービッドソン社によって博物館ができることになったのである。新しい博物館は、同社によって、ミルウォーキー市中心部の広さ約80,000㎡の敷地に2008年夏に完成する予定だ。延べ床面積11,700㎡の広さをもつ新しい建物では、70名のフルタイムの職員が、年間35万人の入館者を迎えることになっている。常設展示では、同社の105年の歴史とともに、歴代のハーレー・デービッドソンのモーターサイクルの完成車が展示されることになっているが、実物（チョッパーも含む）だけが紹介されるわけではないようだ。この世界的なブランドの製造と普及にかかわってきた有名無名の多くの人たちをも丁寧で紹介されるようだ。また収集活動においては、ハーレー・デービッドソン製のモーターサイクルのパーツや製造に使われた工具や機械はもとより、設計図や経営資料を含むアーカイブズも社の内外から精力的に収集されており、それらは開館時にはアーカイブズ室で保管・閲覧可能になるようだ。レストラン、ハーレー・ファンの結婚式場に使えるホテルや、ハーレー・グッズを揃えたショップも用意されるようだ。2006年6月1日に行われた起工式には、ミルウォーキー市長をはじめ、ハーレー・デービッドソン社のOBや、ヘルズ・エンジェルスの格好にキメたチョッパー乗りが多く参加した模様だ。

Harley-Davidson Museum, Milwaukee.

<http://www.h-dmuseum.com/specialevents>

コネチカット科学館が、2008年に開館へ

米国コネチカット州の州都ハートフォードに、コネチカット科学館が2008年末に新しく開館する予定だ。延べ床面積が約13,000㎡の新しい建物は、年間40万人の入館者が訪れることが予定されている。約3,600㎡の展示スペースは10室のホールに分かれ、それぞれ、「運動の力」「宇宙」

「地球」「健康」「エネルギー」「スポーツ」「見る・聴く」「発明と問題解決」「コネチカット川のエコロジー」「乳幼児向けの体験学習展示」をテーマにしている。総事業費：160,000,000ドル。展示設計：Thinc Design and Jeff Kennedy Associates。建築設計：Cesar Pelli & Associates。Connecticut Science Center, Hartford.

<http://ctsciencecenter.org/>

中東・アブダビで、安藤忠雄設計の海事博物館が整備へ

日本を代表する安藤忠雄の設計による海事博物館が、中東のアブダビで整備されることになった。安藤が設計する海事博物館は、アブダビのサディヤット島に計画されている文化施設群の一つであり、完成は2018年を予定している。海事博物館とともに整備される他の文化施設は、フランク・ゲーリーによるグッゲンハイム美術館とジャン・ヌーヴェルによる博物館とザハ・ハディドによる舞台芸術センターだ。Maritime Museum, Abu Dhabi.

<http://www.arcspace.com/architects/aghna/aghna.html>

<http://www.dezeen.com/2007/01/31/gehry-nouvel-ando-and-hadid-build-in-abu-dhabi/>

ロンドン交通博物館が、2007年11月22日にリニューアル開館

ロンドンの中心部にあるロンドン交通博物館が、2年間の全面改装を終えて、2007年11月22日に再開館した。1872年に完成した建物（ウィリアム・ロジャーズ設計）はもともと生花を販売する施設だったが、今回は老朽化した建物の補修と屋内の常設展示の全面更新が主であった。新しく生まれ変わった常設展示では、従来見る事ができた二階建てバスや地下鉄の車両も再び知られるようになったが、世界の大都市における人々の暮らしと交通の関係を紹介した展示が新たに設けられた。東京をはじめ、上海、デリー、パリそしてニューヨークでの通勤の様子が映像で紹介されている。そのほかに、同館が収蔵する多くのデザインが優れているポスターの展示室も設けられている。同館は開館以来、立地場所が劇場街であることもあり、子どもだけでなく、大人にも人気がある観光スポットになっており、今回の全面リニューアルで新たに設けられたカフェバー「Upper Deck」では、勤めを終えた大人向けに特製カクテルも用意されている（カクテルの名：Anorak, Routemaster）。

総工費：22,400,000ポンド。

London Transport Museum, London.

<http://www.ltmuseum.co.uk/>

<http://www.ltmuseum.co.uk/aboutus/348.aspx>

<http://www.24hourmuseum.org.uk/london/news/ART51991.html?ixsi>

http://www.24hourmuseum.org.uk/nwh_gfx_en/ART49270.html

<http://www.newlondonarchitecture.org/project.php?id=135>

ベルリン自然史博物館で、生物の進化展がオープン

生物の進化をテーマにした常設展示ホールが、ベルリンのベルリン自然史博物館（フンボルト大学自然史博物館）で、2007年7月13日にオープンした。

Evolution in Aktion.

Berlin Museum of Natural History, Berlin.

http://www.museum.hu-berlin.de/neue_ausstellung/eroeffnung.asp?l

米MIT博物館で、ヨット設計の大御所ジェリー・ミルグラム博士の業績を紹介した企画展が開催中

2年前に仕事でボストン美術館を訪れる機会があったが、正面玄関前に、2隻のヨットが展示されているのには大変驚いたものだ。それも、1992年の国際ヨットレース「アメリカスカップ」の優勝艇「アメリカ3」と挑戦艇「イル・モロ・ディ・ヴェネツィア」であったのだ！折しも、ボストン美術館では、同館の大寄付者であり、「アメリカ3」のスキッパーでもあった大富豪ウィリアム・コッチ氏の個人コレクション展が開催されていたが、二隻のアメリカスカップの出場艇も展覧会の出資者であるコッチ氏の強い要望で実現したものだった。

さて、「アメリカ3」を設計したのは、マサチューセッツ工科大学で海洋エンジニアリングを研究するジェリー・ミルグラム教授だが、ミルグラム教授こそ、アメリカスカップに出場した1968年以降のすべてのアメリカ艇の船体とセールを設計した人物としてもヨットの世界ではよく知られており、2003年のアメリカスカップの優勝艇も設計している。そのミルグラム博士の長いヨット設計の業績を紹介した企画展が、教授の退官を記して、マサチューセッツ工科大学博物館で開催されている（同展のスポンサーも、コッチ氏）。開催期間：2007年8月31日～2008年2月3日。

Professor Jerry Milgram: An Exceptional Ocean Engineer.

MIT Museum, Cambridge.

<http://web.mit.edu/museum/exhibitions/compton.html>

<http://web.mit.edu/newsoffice/2007/milgram-tt0919.html>

<http://web.mit.edu/newsoffice/2007/techtalk52-2.pdf>

http://www.boston.com/ae/theater_arts/articles/2005/08/30/furor_ahoy/

英コンウォール海事博物館で、イアン・プロクター回顧展が開催

イアン・プロクター（1918～1992）は、1950年代にはじめてセーリング・ディンギーにアルミニウム製のマストを使用したことで知られ、彼のデザインをもとに4万艇以上製作されたトッパー級ディンギーはまさしく彼を世界的に有名なヨット・デザイナーにならしめた。また1987年のアメリカスカップの出場艇のうち12艇が、プロクターがデザインしたマストを使用していたのである。彼はまたグラスファイバー製のテンペスト級ディンギーを初めて設計したことでも知られている。さらに第二次世界大戦中に軍務に就いていた間にポリオに感染したために右腕が麻痺したにもかかわらず、戦後数々のヨットレースで優勝カップを手にしたことでも、イギリスのヨットレースの歴史に名前を刻んでいる。

イアン・プロクターの回顧展が、イギリスのコンウォール海事博物館（2003年3月14日開館）で、先頃2007年9月17日から12月17日まで開催された。同展では、彼の手による数々のヨット・デザインの業績が、実物、写真と設計図等で紹介された。また最新のトッパー級や最初のテンペスト級のディンギーも、同館の屋内展示ホール「フローティラ Flotilla」で紹介された。

Ian Proctor: The Tempest.

National Maritime Museum Cornwall, Falmouth.

http://www.nmmc.co.uk/index.php?page=News_Centre&id=117&newsid=101

http://www.nmmc.co.uk/index.php?page=Whats_On&id=90&event_id=253

*（やすい・りょう） E-post:ZAKvaran@aurorao.ocn.ne.jp

1月2月の特別展

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
岩手県立博物館	テーマ展「岩手の溪流と釣り人」	11月23日～2月11日
秋田県立博物館	企画展「秋田の手しごと その式（金工・漆工）」	12月8日～4月13日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「星団めぐり」	11月1日～1月31日
スペースパーク	第7回コンピュータグラフィックス展～行こうよ！宇宙レストランへ～	11月1日～1月7日
	スペースパーク企画展「ダンボールであそぼう！～迷路でたんけん♪～」	12月1日～1月14日
	ホワイエ企画展「スペースパークボランティアの会天来写真展『レンズの中の宝石箱2』」	2月1日～3月31日
ミュージアムパーク 茨城県自然博物館	第41回企画展「ミヤマスカシユリの薫る里－久慈川の流れにのって－茨城の自然を探る総合調査報告－」	10月20日～1月14日
栃木県立博物館	企画展「集まれ！ホネの動物たち」	1月4日～3月30日
川口市立科学館	特別展「飛行」～大空への挑戦～	12月8日～2月11日
入間市博物館（アリット）	第11回「むかしのくらしと道具展」	1月6日～2月11日
千葉県立中央博物館	「房総発掘ものがたり」	1月19日～3月2日
千葉県立現代産業科学館	「五市中学校合同技術・家庭科作品展」	1月16日～1月20日
	「第31回少年少女発明クラブ作品展」	1月29日～2月3日
国立科学博物館	特別展「大ロボット博」	10月23日～1月27日
	国立科学博物館創立130周年「富士山展 宝永噴火三〇〇年」	12月15日～1月20日
機械産業記念館（TEPIA）	「ちえものづくり展～社会を豊かにする最先端技術～」 PART IV	8月6日～2月29日
地下鉄博物館	地下鉄開通80周年記念展「地下鉄の誕生と発展の足跡」	12月4日～1月27日
板橋区立教育科学館	特別展「ジュニア発明展」	2月2日～3月2日
多摩六都科学館	化石展リニューアル「関東山地に衝突した丹沢山地と伊豆半島」	12月20日～12月14日
三菱みなとみらい技術館	特別展「見あげてみよう みんなの空 ー天気がわかると地球がみえる！ー」	11月20日～3月30日
馬の博物館	新収蔵資料展	1月5日～2月24日
	写真展「寒立馬」	1月5日～2月24日
横浜こども科学館	企画展「なるほど電話展」	10月6日～2月11日
黒部市吉田科学館	巡回写真展「富士フィルムフォトコンテスト」	2月9日～3月9日
富山市科学博物館 （旧科学文化センター）	「私の身近な自然展」	12月15日～1月20日
佐久市子ども未来館	巡回展「科学市場」	12月15日～3月30日
ディスカバリーパーク焼津	開園10周年記念特別展第4弾「ためして なっとく 科学のクイズ展」	12月15日～4月6日
豊橋市自然史博物館	干支展「ねずみにチューもく」	12月22日～1月27日
名古屋市科学館	企画展「名古屋城を科学する__ヒメボタルの巻」	11月3日～1月14日
トヨタ博物館	企画展「“初公開” 収蔵車展」	12月8日～3月23日
滋賀県立 琵琶湖博物館	「注文の多い湖魚の料理店」	12月11日～2月17日
	水族企画展示「湖魚の今...。そして未来！」	12月11日～2月17日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「ひょうごの里山・日本の里山」	10月20日～1月20日
	企画展「クリプトガミック・ボタニー」	2月23日～8月20日
明石市立天文科学館	「2008年全国カレンダー展」	12月15日～1月27日
出雲科学館	特別展「木って、ステ木！～木材と私たちの生活～」	1月19日～2月17日
倉敷市立自然史博物館	第15回しぜんしくらしき賞作品展	12月9日～1月31日

開 催 館	展 覧 会 名	開催期間
防府市青少年科学館	企画展「暗号展」－緊急指令！暗号を解読せよ！－	2月9日～3月9日
徳島県立博物館	特別陳列「徳島城下町の世界」	1月7日～3月2日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	巡回展「毛利宇宙飛行士の部屋」	12月1日～1月14日
北九州市立いのちのたび博物館	「ファープルにまなぶ」	12月22日～2月11日
佐賀県立宇宙科学館	冬の特別企画展「月～45億年の絆（きずな）～」	12月15日～2月17日
熊本市立熊本博物館	平成19年度特別展「発掘された日本列島2007－新発見 考古速報展－」	12月15日～1月20日

「リニューアルオープン」

串本海中公園センター

〔主な更新箇所〕 水族館内の内装（A・B・C Zone、エントランス）

〔展示面積〕 727.5m²

〔オープンの期日〕 平成19年6月16日（金）

〔準備期間〕 平成19年3月23日～平成19年6月13日

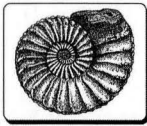
〔担当者〕 株式会社 濱本組

〔総工費〕 36,336,995円



TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL. 03(3354)0131 (代表) ◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL 03-3350-6725 FAX 03-3350-6745

http://www.tokyo-science.co.jp

E-mail: info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

「人が集う空間」
という意味を、
ノムラは
いつもトータルで
考えています。



集まる理由を、
ノムラは
知っています。

集客環境づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、設計、制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

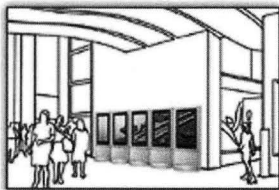
株式会社 乃村工芸社

http://www.nomurakougei.co.jp

本社: 東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171(代)

映像・情報配信ソリューション NMStage

入館案内表示



チケット売場

館内案内板

展示スペース

NMコントローラ端末

大型映像表示装置



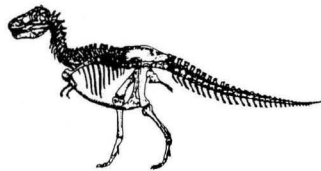
パナソニックSSマーケティング株式会社

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-15-5 新宿三光町ビル

電話03-5919-5176 FAX03-5919-5216

http://WWW.pssm.co.jp

※ 世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 ゼネラル サイエンス

コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802

TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

kokoro

株式会社 ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号

TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050

http://www.kokoro-dreams.co.jp/

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
投映を可能にした小型・高精細のデジタル
プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
CG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、
さまざまなシーンで活躍します。



コニカミルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒173-0003 東京都板橋区加賀1-6-1

TEL (03) 5248-7051

大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階

TEL (06) 6110-0570

東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋町1-8

TEL (0533) 89-3570

URL: http://pla.konicaminolta.jp

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長

國府田良樹

千葉県立中央博物館 教育普及課長 森田利仁

科学技術館 企画広報室次長 田代英俊

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長 井上透

全科協事務局

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 高橋、三浦

Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成20年1月1日

発行 全国科学博物館協議会◎

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社